

よもやま話に花が咲く。えきんぐらがお届けする小ネタ袋。

蔵通信

九号
2007.10

発行：絵金蔵運営委員会
発行日：2007年10月1日
〒781-5310
高知県香南市赤岡町538
Tel/Fax 0887-57-7117
ekingura@mxi.netwave.or.jp
http://www.ekingura.com/

第八話 女たちの狂宴

絵金百話

シリーズ



INFORMATION

天守物語

泉鏡花／作

封建時代、播州姫路の白鷺城天守閣には、伝説の獅子頭とその不思議な力で生きる天守夫人・富姫たちが住んでいた。100年もの間、誰も近寄ったことのないこの天守に一人の若侍が上がってくる…

夜の高知城、そして平成によみがえった芝居小屋弁天座を舞台に繰り広げられる、泉鏡花の夢幻の世界。海外での公演もこなす「高知演劇ネットワーク演会」が劇場を飛び出し、私たちが非日常の世界へとといざないます。

地元演劇人たちによる渾身の舞台、是非ご来場ください。

高知城公演 日時 10/11(木)・12(金)・13(土)・14(日)

19:30開演(開場19:00) 高知城二ノ丸特設野外シアターにて
★追手門から二ノ丸までの石段に絵金の屏風絵(レプリカ)が飾られます。

香南市赤岡町 弁天座公演 日時 11/10(土)・11(日)

15:00開演(開場14:30)

入場料 一般前売り 2000円
一般当日 2500円
高校生以下 1000円

チケット販売所 高知県立美術館ミュージアムショップ、弁天座
高新プレイガイド、TUTAYAほか

お問い合わせ
「天守物語」プロジェクト実行委員会 事務局
担当：岡村実記 tenshu@kochi-engeki.net
TEL 090-7625-9674 http://www.kochi-engeki.net/tenshu

主催：「天守物語」プロジェクト実行委員会
共催：おびさんマルシェ実行委員会・協同組合帯屋町筋・絵金蔵・弁天座
企画制作：Theatre Lab. こうちMe



「誰でもわかるNPO講座」開講!

日時：平成19年10月26日(金) 19:00～

場所：弁天座(香南市赤岡町)

講師：半田雅典氏(高知県ボランティアNPOセンター)

有元和哉氏(香美市神母ノ木風鈴横丁実行委員会 代表)

*お申し込み・お問い合わせは絵金蔵まで TEL 0887-57-7117

主催：絵金蔵運営委員会 協力：高知県ボランティアNPOセンター

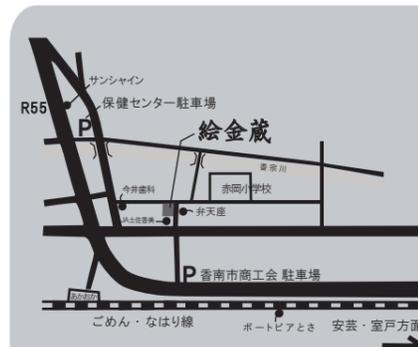
入場無料

編集後記

絵金蔵も終わり、普段の静けさを取り戻したかに見える赤岡ですが、十月には県内の伝統芸能の団体が揃う「土佐の地歌舞伎 弁天座の巻」、また十一月には演劇ネットワークによる「天守物語」公演、そして十二月には「冬の夏祭り」が行われます。町のみならず、赤岡の準備に大忙し! 赤岡の準備に大忙し! 赤岡の準備に大忙し! 赤岡の準備に大忙し! 赤岡の準備に大忙し! 赤岡の準備に大忙し! 赤岡の準備に大忙し! 赤岡の準備に大忙し! 赤岡の準備に大忙し! 赤岡の準備に大忙し!

〔絵金蔵〕

開館時間 午前9時～午後5時
(入館は午後4時半まで)
観覧料 大人500円、高校生300円
小・中学生150円
(15名以上の団体は各50円引き)
休館日 毎週月曜日
(月曜が祝日の場合は火曜)
12月29日～1月3日



幕末土佐の芝居絵師・金蔵(通称・絵金)。彼は土佐各地の祭りに多くの芝居絵屏風を残しました。絵金蔵は、平成17年2月、赤岡の地に残る23点の芝居絵屏風を収蔵・保存するために作られた施設です。

絵金蔵の三つの使命

- 年に一度 絵金の文化を守るため
- 伝承 次世代へ伝えるため
- 縁結び 地域を超えて世代を超えて

絵金蔵がで・き・る・まで★

partⅢ 「あかおか昭和」編

平成17年2月11日にオープンした絵金蔵はまだ2歳と少し。ここに至るまでには話せば長い道のりがありました…。まちづくりをめぐる、さまざまなディスカッションを重ねてきた地域の人々のユニークな試みを紹介します。



愛おしい家たち

現在も古い商家が点在する赤岡の商店街。江戸時代から商工業が盛んで、旧道は参勤交代の一行が通った道でもありました。「厨子二階（つしにかい）」と呼ばれる赤岡の古い家のかたちは、藩主を上から見下ろすのは無礼である、という考えから二階部分を低くし、物置などに使ったものと伝えられています。



店内の商品、インテリアまで再現。のぞきこむと古くて新しい世界が広がります。

そんな昔の風情を残した昭和の赤岡の町なみが、絵金蔵の展示室にミニチュアサイズで再現されています。作ったのは生粋の赤岡っ子、澤田美枝さん。昔から、家を見たり中を想像したりするのが大好きだったそうです。

赤岡で町づくりのワークショップに参加し始めた頃から作り続け素材も紙粘土からよりきめの細かい石粉粘土へ、屋根はラインを入れただけの瓦から、一枚一枚を貼り付けたよりリアルな瓦へと進化していきました。

古き良き町なみへの限りない愛情を感じる作品…
絵金蔵にお越しの際はぜひ、中ものぞいてみて下さいね！



レトロモダンな旧、野島酒店のファザード

shop information

やつゆ会金木犀の絵金グッズ〜

赤岡のやさしくて強いおかみさんグループ「やつゆ会金木犀」の作る絵金グッズ。絵金祭りを除いてはここでしか買えません。手作りのあたたかみと、絵金のおどろおどろしさがマッチング(?)したオリジナルグッズを是非ご賢になってみてください。



シルクスクリーンで丁寧にプリントした絵金手ぬぐい



“魔除け”のウワサあり!? 絵金ミニ屏風

絵金百話

第八話 女たちの狂宴

ちょうはながためいかのしまだい こさかべやかた
蝶花形名歌島台 小坂部館

< 概要 >

山内氏入国前の土佐の太守であった長宗我部氏の家督相続と、豊臣、徳川両家に関わる内紛事件を脚色した作品。作者は若竹笛躬・中村魚眼、寛政5年（1793）7月、大阪・豊竹座にて人形浄瑠璃として初演されました。

長宗我部元親がモデルとなった小坂部音近には二人の娘がおり、姉葉末は真柴久吉の家臣、加藤正清に、妹は大内義広の家臣、出雲宗貞に嫁いでいます。父の長寿の祝いの席にやってきた二人は、音近を互いに敵対する自分の夫の味方につけようと言い争い、喧嘩をはじめます。争いが収まらないのを見て取った音近は姉の子、笹市と妹の子松太郎の二人の孫に真剣勝負をさせ勝った方の味方につくと言います。勝負の結果、笹市が勝ち、松太郎は斬り殺されることに…。苦しい胸の内を隠し、鼓を打ち謡をうたいながら二人を見守っていた音近は、この後短刀を腹に突き立て、実は姉葉末は兄元胤の忘れ形見、恩義ある兄の子笹市に勝たせるため、笹市には名刀を、実の孫松太郎には細工をした鈍刀を与え、戦わせたのだと告白したのです。

赤岡町内にはこの小坂部館の場面を描いた作品が2つ伝えられており、隣町香我美町の吉川家にも小坂部音近とその娘を描いた白描画が残されています。その他、高知県下には香南市香我美町、高知市の朝倉神社などにも同じ場面を描いた作品があり、土佐と関わりの深いこの作品が各地で大いに人気を博していたことをうかがわせます。

「邪魔仕やんなど振りほどく、風に屏風の柳腰、帯取って引き戻す、腕もかよわき糸薄、乱す黒髪両方が、掴み合うたる姉妹喧嘩」「心覚えの此の二腰、是を以て立合へと、渡せば取ってめいめいが…股立りりしく身拵へ、戸の透間より差覗く、母と母とは在られぬ思ひ」（『浄瑠璃名作集』有明文庫）といった原作の描写を見事にビジュアル化した臨場感あふれる芝居絵の数々をご紹介します。

線描の妙 ～白描画の魅力～



「蝶花形名歌島台 小坂部館」小坂部音近と娘 34×48cm
香我美町・吉川登志之氏所蔵



絵金の芝居絵の魅力が鮮烈な色、大胆な構図にあることはいまでもありませんが、伸びやかで強い線こそ、彼の最大の魅力といってもよいかもしれません。
吉川家所蔵の白描画に描かれた絵金の線描は、屏風絵にみる線よりさらに奔放、自在で彼の力量を余すところなく伝えています。



【参考文献】
近森敏夫『絵金画譜』1988年 岩崎美術社
『絵金の白描』1971年 未来社
『絵金展 土佐の芝居絵と絵師金蔵』高知県立美術館 1996年



音近（中央）から刀を渡される笠市と松太郎。モノクロではよく見えませんが二人の着物にはそれぞれの家の家紋「蛇の目紋」と「一文字三つ星紋」が描かれており、左右奥には二人の両親が見守っています。前掲作品の続きの場面になる本作は、画面構成は異なりますが音近の顔や着衣の柄に共通点が見られます。

蝶花形名歌島台 小坂部館
二曲一隻屏風 紙本着色
176.0×161.5cm
赤岡町本町四区所蔵

もと香我美町の浅上王子宮の絵馬台に飾られたもの。
切戸に鍵をかけて隔てられ、必死の形相でわが子を見守る葉末と真弓、苦しい胸の内を隠し鼓を打つ音近、切り結ぶ従兄弟どうしの笠市と松太郎…姉妹の争いを描いた前掲赤岡町本町二区、四区の絵の続きの場面になります。

蝶花形名歌島台 小坂部館
襖絵 116×119cm
香我美町前田部落所蔵





蝶花形名歌島台 小坂部館

二曲一隻屏風/紙本著色/176.0×161.5cm
赤岡町本町二区所蔵

— あらすじ —

当代一の軍略家、小坂部音近の姉娘、葉末は加藤正清に、妹娘真弓は出雲宗貞に嫁いでいる。

父の長寿の祝いの席にやってきた二人は音近を互いに敵対する自分の夫の味方につけようと言い争い、ついにはつかみあいの喧嘩となる。

いっこうに収まらない二人の争いの板ばさみとなった音近は、父の使いとして現れたわずか10歳の笹市（姉葉末の子）と松太郎（妹真弓の子）二人の孫に真剣勝負をさせ、勝った方の味方につくと言う。

勝負の結果、妹の子松太郎は深手を負い、死んでしまう。音近は勝負を見届け、姉娘側の味方となると宣言する。ところがその直後音近は短刀を腹に突き立て、実は姉娘葉末は兄元胤の忘れ形見、恩義ある兄の子笹市に勝たせるため、笹市には名刀を、実の孫松太郎には細工をした鈍刀を与え、戦わせたのだと告白する。

*1 『浄瑠璃名作集』有明文庫 1923年7月

■ 死ぬる覚悟に極めてみます。

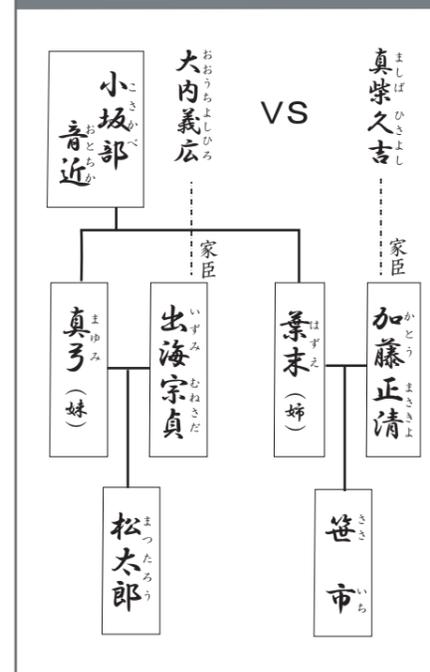
袴を着た中に覚悟の死に装束を着け、父母の期待にこたえようとする姉娘、葉末の子笹市。両肩先に豊臣秀吉の家臣で加藤正清のモデル、加藤清正の家紋「蛇の目紋」がついています。



■ 苦渋の決断

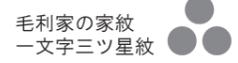
二人の娘のふるまいも婚家と思うがゆえのことと理解し姉妹の仲をなんとか取り持とうとする音近。濃茶を点ててすすめますが二人の耳には届きません。そこへ父母の期待を背負い、覚悟を決めた二人の孫が現れ音近は決断を迫られます。

蝶花形名歌島台 主要登場人物



■ 稚心のいぢらしさ

姉妹の争いの後、従兄笹市との真剣勝負で斬り殺されてしまう松太郎。10歳という幼さながら、笹市と同じく白装束を着こんで臨み、最期まで気丈にふるまいます。「ア、か、さま…負けたはわたしが未熟から、大事の役目を仕損じた。憎いやつちやとと、様に呵られうかとそれが悲しい。」



■ 必死の妹

姉に負けじと必死につかみかかる妹。「さう言はしやんすお前こそ、先へ廻って久吉方へ勤める心でござんせう。」

■ エ、そこを退きやらぬか！

髪を振り乱し、帯を取られてのけぞりながら妹の手をつかむ姉葉末。「オ、爰へは何しにエ聞えた、わしを出し抜き父上を、大内方へ味方に付けうと思ひやるのか！」

み・ど・こ・ろ

数ある絵金の屏風絵のなかでもひとときあでやかな作品。いさかう二人の体がからみ合いながら、まるで舞を舞うかのように美しく緊張感をみなぎらせ生き生きと描かれています。

素早いタッチで描かれた葉末(右)の着物の花模様、胡粉(貝殻の粉末)を墨に混ぜて上書きした乱れ髪の生々しいまでの質感など、随所に絵金の力量を物語る描写が散りばめられています。

邪魔仕やんなど振りほどく、風に屏風の柳腰、帯取って引き戻す、腕もかよわき糸薄、乱す黒髪両方が掴み合うたる姉妹喧嘩…*1

10月の蔵の穴で本物を公開中!

【参考文献】『浄瑠璃名作集』有明文庫 1923年7月
『絵金展 土佐の芝居絵と絵師金蔵』高知県立美術館 1996年
『絵金蔵収蔵品目録』赤岡町 2005年2月
近森敏夫『絵金読本』香南市商工水産課 2006年3月 改訂版